

# 『実例詳解古典文法総覧』補遺稿 + 源氏解読

連載第 68 回 第 12.4 節～第 12.5 節

2020 年 10 月 15 日

小 田 勝

第 12.4 節 381 頁「その他、解釈上注意すべき「に」の例」を追加する。

- ・とぶさ (=枝) 立て足柄山に船木伐り木に (=タダノ木トシテ) 伐り行きつあたり船木を (万 391)
- ・唐の太宗文皇帝は、鬚を切つて薬に焼き、功臣に賜ふ。(平治・金刀比羅本)
- ・千歳経ん君が齡に (=齡ニアヤカッテ) 藤波の松の枝にもかかりぬるかな (平家 4・還御)
- ・七夕にかせる (=貸シタ) きぬの、露に (=露ニ濡レテ) 返りたりければ (続詞花・詞書)
- ・天の川遠き渡にあらねども君が船出は年に (=一年間カケテ) こそ待て (拾遺 144)
- ・好き者を花のあたりに寄せざらばこの常夏に (=ハ) 根絶えましやは (公任集) <仲文集「この常夏も」>

用例(69)について、「に」の用法に、「**離脱点(「から」の意)を表す**」用法を認めたいと思う。

- ・片時たち離れ奉らず馴れ聞こえつる人に、にはかに別かれ奉りて (源・夕顔)
- ・今日は、二条の院に (=カラ) 離れおはして (源・葵)
- ・思ひそめてしことは、さらに御心に離れねど (源・賢木)
- ・[中君ハ] 人に遠くて生ひ出でさせ給ふめれば (源・総角)
- ・内裏にも (=帝カラモ)、御気色 [左大臣ニ] 賜らせ (=イタダカセ) 給へりければ (源・桐壺)
- ・この殿下 (=忠実)、[楽道ヲ] 按察大納言宗俊卿に (=カラ) 伝へさせ給ふ (=伝授ナサル)。(文机談)

次例の下線部の「に」は連用形語尾か格助詞か判然としないが (私は後者とみる)、これは、「普通の歌い方に変えた」のではなく、波線部にみるように、「普通の歌い方から変えた」の意であろう。

- ・この殿 (=雅信) こそ、「荒田に生ふる」(トイウ風俗歌) をば、なべてのやうには謡

ひ変へさせ給ひけれ。…「富草の花、手に摘み入れて、宮へ参らむ」のほどを、  
例には変はりたるやうに承りしかば (大鏡)

同頁「12.5 格助詞「にて」。「①場所・時間」の類例をあげる。

- ・申の刻にて源氏参り給ふ。(源・桐壺)

次例は「枝の所で折った」の意 (→ § 11.1.5)。

- ・去年の春枝にて折りし藤の花ころもに着んと思ひけんやは (信明集)

「②状態・資格」の類例、

- ・さる方の後見にてはぐくまむと思ほしとりて (源・末摘花)

「③手段・方法・材料」の類例、

- ・歩行にて、小女童一人を具して、大原の良忍聖のもとへ行きつつ (十訓抄 10-60)

382 頁「④原因・理由」の類例、

- ・御物の怪にて、時々なやませ給ふこともありつれど (源・若菜上)

用例(2)～(8)の類例をあげる。

- ・もとの淑景舎を御曹司にて、母御息所の御方の人々まかで散らず候はせ給ふ。(源・桐壺)
- ・御屏風に龍田川に紅葉流れたるかたを書けりけるを題にて詠める (古今 293 題詞)

この句型を文末に置くと、次のようになる。

- ・波いとかめしう立ち来て、人々の足を空なり (=足ヲ空トスル)。(源・須磨)
- ・「なほ、この御返り [セサセ給へ]。[柏木ハ] まことにこれをとぢめにもこそ侍れ」  
と [小侍従 (女房) ガ女三宮ニ] 聞こゆれば (源・柏木)

次例は「…を…にて」の「を」の非表示の例である。

- ・ただいと近う仕うまつり馴れたるかぎり七八人ばかり 御供にて、いとかすかに  
出で立ち給ふ。(源・須磨)

「…を…とて」の句型もある。

- ・[藤壺ハ] 王命婦を [自分ノ] 御代はり とて、[春宮ニ] さぶらはせ給へば (源・須磨)

383 頁用例(14)(15)の類例をあげる。

- ・「[大納言ハ] めでたの人の御様や。我、女にて、かうばかりうちおぼえ、ながめたらむを見ては、いみじからむ後の位をも捨てて、靡き寄りなむかし」と [宰相中将 (男) ハ大納言ヲ] つくづくまもり入りたる。(寝覚)

\*\*\*\*\*

源氏物語（湖月抄） 解説 桐壺（13）

（増註版 22 頁、  
新全集 30 頁）かえって後悔するに違いないことだと存じながらも、ただあの遺言に背くまいとばかりに、出仕させましたが、身に余るほどのご寵愛が<sup>①</sup>、すべてにつけてもつたいないので、人並に扱われない恥<sup>②</sup>を隠し隠ししては、宮仕えをしていらっしゃるようだったが、人の嫉みが深く積もり、心を痛めることが多くなっていきましたところ、横死のようなありさまで、とうとうこのようになってしまいましたので、かえって恨めしく、畏れ多いご愛情を<sup>③</sup>存じないではられません<sup>④</sup>。これも是非をわきまえぬ親心の闇でございまして……」と、最後まで言い切れずに涙に咽んでいらっしゃるうちに、夜も更けてしまった。「帝もそのようで……。『自分のお心ながら、むやみに人が見て驚くくらいに思わずにはいらっしゃれなかったのも<sup>⑤</sup>、長くは続かないはずの運命ゆえだったのだ<sup>⑥</sup>と、今となっては辛く思われる宿縁で……。決して少しも、人の心を傷つけることはしていないだろう<sup>⑦</sup>と思うが、ただこの人が原因で、多くのあつてはならない恨みを負ったあげくには、

（注）①皮肉。 ②「人げなき恥＝人げなしとの（と思はるる）恥」。判断内容を表す連体修飾。『総覧』323頁。 ③原文「かへりてはつらくなん、かしこき御心ざしを思ひ給へられ侍る」。「引退を悲しく思う→悲しく引退を思う」という語序に注意。『総覧』292-293頁。 ④原文「思ひ給へられ侍る」の「られ」は自発。 ⑤原文「思されしも」の「れ」は自発。 ⑥原文「長かるまじき〔故〕なりけり」。『総覧』83頁。 ⑦「人の心をまげたることはあらし＝…ことはせじ」。『総覧』58頁。